〈書　評〉

高橋美由紀著『伊勢神道の成立と展開』（大明堂・平成六年）

佐藤眞人

本書は中世神道の一流派である伊勢神道の研究書である。伊勢神道は中世のほぼ同時代に形成された両部神道・山王神道をはじめ、中世後期の吉田神道や近世の儒家神道に多大な影響を与えている。著者自身「あとがき」の中で伊勢神道を研究テーマに選んだ理由として「そこが明らかになれば神道史を展望する基軸を得られる」と述べておられるように、神道史上に肝要な位置を占める思想である。

本書の内容を構成に従って紹介していきたい。まず第一章「神道五部書の成立と外来思想」は主として伊勢神道の形成における仏教・道家思想といった外来思想の影響の問題を取り上げている。第一節「神道五部書と仏教思想」では、本地垂迹思想との関係をめぐって伊勢神道がいかなる思想的立場にあるのかという問題を扱う。とりわけ『宝基本記』に引かれるところの、地神の末に天下四国の人夫が生死長夜の闇に沈み根国底国に吟くにより、皇天に代って西天の真人（仏陀）が法を説き太神は本居に帰り託宣を止め給うたという有名な託宣の一文の解釈をめぐり、これを反本地垂迹説であるとする久保田収・石田一良説、反本地垂迹説という概念自体が誤謬であるとする西田長男説を紹介し、これら従来の先学の所説を踏まえながら独自の考察を行っている。すなわち五部書の中に『無量寿経』『長阿含経』『覚王開闢神呪』『釈摩訶衍論』等の仏典の影響が見られることを指摘し、従って五部書の構成要素として仏教を除外することはできず、その仏教思想は東密との関係が深いとする。しかしながらその仏典の引用のありかたは仏教思想をそのままに受容したのではなく、自己を表現する材料として取り入れたに過ぎないとする。『中臣祓訓解』等の両部神道書に刺激と影響をうけながらも、伊勢神道の思想は「神と仏を本来異なるものとして区別し、神道の独自性を示したもの」（12頁）であると結論付けている。

第二節「伊勢神道の形成と道家思想」では、従来あまり着目されることのなかった伊勢神道書の『大元神一秘書』の中に『河上公注老子』『老子述義』などの道家関係典籍が多数引用されていることを指摘する。さらに遡って五部書にも道家思想の影響が認められ、伊勢神道にとって道家思想の受容は末梢的なものではなく、思想の本質と関わるものであるとする。すなわち道家思想における、万物

を生成しこれを育む超越的存在としての「道」、現象に内在し現象を成立せしめている実在としての「道」の観念が、そのまま伊勢神道の神観念に投影されているとする。伊勢神道の特色とされ、後世の神道思想にも多大な影響を及ぼした超越的かつ内在的な神観念が道家思想に由来するものであることを鮮やかに解明しており、また従来仏教との関係からのみ論じられがちであった伊勢神道の思想を道家思想との影響関係から捉えた点は、中世神道研究史上の新たな見地を開いたといえよう。

第三節「伊勢神道の形成と度会行忠」は前節で取り上げた『大元神一秘書』の成立年代・述作者を考察する。『大元神一秘書』の成立は、文永七年（一二七〇）あるいは建治三年（一二七七）を成立上限とする『倭姫命世記』の成立年代を遡らないこと、また外宮禰宜・度会行忠（一二三六～一三〇四）作の『伊勢二所太神宮神名秘書』（弘安八年撰上・弘安十年修訂）が『大元神一秘書』と密接な関係にあり、おそらく本書を手許に置いて述作したと考えられることの二点から、本書の作者は度会行忠であると推定する。さらに五部書のうち「神宮三部書」として一括される『御鎮座次第記』『御鎮座伝記』『御鎮座本紀』の中の道家思想的記述がいずれも『大元神一秘書』の内容を踏まえたものであり、従って神宮三部書の述作者が度会行忠自身であることを主張する。また行忠が建治三年（一二七七）の書写の段階で『宝基本記』の内容にも手を加えた可能性を指摘している。神宮三部書の作者を度会行忠に比定することは従来からなされてきているが、この論考にさらなる有力な証拠を提供するものといえよう。また行忠がいかなる思想的・人脈的経路で道家思想に着目し受容したのか、中世思想の潮流全体における道家思想の位置付けを見きわめた上でさらなる問題の掘り下げが期待される。

二

第二章「伊勢神道成立の思想的背景」は伊勢神道が形成された時代背景を取り上げている。第一節「伊勢神道の成立とその時代」は、まず『長寛勘文』に見える伊勢・熊野同体説および非同体説の論争内容を子細に検討し、そうした論争がこの時代に引き起こされるにいたった要因を考察する。熊野信仰は「治天の君」たる院の権威を背景として発達したものであり、熊野の神は天皇の権威に支えられる伊勢神宮と並ぶ「新しい国家神」として、院政時代において新たに顕現した神であるとする。さらに『長寛勘文』の同体説において、熊野神の至尊性を熊野の祭神・伊弉冉尊が天照大神の母神であるという記紀神話の神統譜を拠り所として導き出していることに着目し「記紀神話の再生は古代的神祇秩序を突き崩し中世的神話世界をうち建てる有力な武器として歴史の舞台に再生してくる」（73頁）という逆説的で興味深い指摘をしている。

次いで、中世神道と本地垂迹思想との関連性を取り上げ、本地垂迹説は「中世神道の扉を開く重要な鍵」をもたらしたとし、両者の関係を掘り下げて考察している。山王神道の伊勢・日吉同体説、三輪流神道の伊勢・三輪同体説を検討し、『長寛勘文』の同体説と同様に、これらの教説においても各々の神の至尊性を主張する理論的支えとして本地垂迹思想が機能していたことを論証する。

さらに伊勢神宮にとっては「本地垂迹思想が神宮の地位の絶対性を奪い取る重要な思想的武器になっていたという事実」（80頁）があるとし、伊勢神道の教説は神の地位を本地仏に還元してしまう仏教的普遍主義に対抗する形で「記紀神話および社伝によって個別主義の論理に回帰せざるを得なかった」（同頁）としている。伊勢神道においては神宮皇祖神観と神国思想が、かかる立場から強調されたとする。

その一方伊勢神道が背負っていた、外宮を内宮と並ぶ尊貴な社にしようとする課題は、伊勢本『古語拾遺』の神統譜を援用して外宮神を皇祖神として仕立て上げることによって達成された。このことは一面において伊勢神道が、他の中世神道諸流と同様「神々の下剋上」の潮流の担い手であったことを立証する。伊勢神道の提唱者が内宮ではなく外宮の祠官であった所以がここに明らかにされている。

第二節「伊勢神道と末法思想」は中世仏教思想の基軸となる末法思想と伊勢神道との関連を追求している。神祇信仰において末法思想は善神捨国思想として展開したと見る。その一方鎌倉新仏教において典型的に看取される「時処機相応」の思想が末法思想と不可分の関係にあることを踏まえた上で、神祇が「時処機相応」の救済者として立ち現われ崇拝されたことを『園城寺伝記』の公顕の説話や『発心集』『撰集抄』の神祇説話によって論証する。次いで山王神道・両部神道においても救済者としての神が説かれていることを確認し、とりわけ両部神道の『中臣祓訓解』においては日本仏土観・神国観が強調されており、これが伊勢神道の形成を触発したとする。初期の伊勢神道においては濁世の救済者として伊勢両宮の神を位置付ける方向で思想が形成されており、その後の思想展開においては日本の神国としての特殊性によって末法思想を超克しようとする方向性が見出されるという。すなわち中世神道が鎌倉新仏教と土壌を同じくする宗教運動であったことを明らかにしている。

第三節「伊勢神宮をめぐる本地垂迹思想」においては、伊勢神宮における本地垂迹思想の形成過程を概観する。『太神宮諸雑事記』天平十四年の橘諸兄参宮記事の中に天照大神と毘盧舎那仏とを関連づける記述があるが、これは本地垂迹説とはいえず、伊勢神宮における本迹説の初見は伊勢が救世観音の変身であるとする『江談抄』「熊野三所本縁事」条の記事に求められるとする。さらに後世一般的となる大日如来本地説は十二世紀後半から十三世紀にかけて高野山において発生したこと、さらに西行が媒介者となって伊勢の地に伝わった可能性が高く、これを契機として伊勢の地に両部神道が発生したと推論する。また『沙石集』に見える外宮本地仏＝阿弥陀説を検討し、これが神宮祠官の間の浄土信仰から発生したものであることを考察している。

三

第三章「伊勢神道の思想とその展開」は伊勢神道の思想自体の考察である。第一節は「伊勢神道の外宮祭神論」である。伊勢神道は外宮祭神を内宮祭神天照大神と同格化する目的を内包しており、外宮祭神論は伊勢神道の作為性の最たるものとして近世の吉見幸和の『五部書説弁』以来非難にさらされた。著者は外宮の祭神論につい

て検討を加えるにあたり、まず安津素彦氏らの学説のように神道五部書を一括して扱う姿勢を批判し、外宮祭神説の基本となる外宮祭神・豊受大神と天御中主神との同体説が、五部書のうち『宝基本記』『倭姫命世記』の二書においては明確には認められず「神宮三部書」においてのみ認められることを指摘する。また豊受大神と国常立尊との同体説は五部書の段階においては認められないとする。初期伊勢神道においては国常立尊は始源神として位置付けられており、内外両宮の神はその化現であるとするのが本義であり、度会家行の段階に至ってはじめて豊受大神・天御中主神・国常立尊の三神が同体の神として観念されるようになったとする。

神宮三部書における豊受大神・天御中主神同体論は、その神統譜を整理してみると天御中主神（即ち豊受大神）が天孫・天津彦々火瓊々杵尊の母方の祖神である高皇産霊神の父神として位置付けられている点が注目されるという。天御中主神を高皇産霊神の父神とすることは伊勢本系の『古語拾遺』に見出され、この神統譜を導入することにより外宮祭神に天照大神と並ぶ皇祖神としての性格が付与されたとする。

第二節「初期伊勢神道の思想」は五部書および度会行忠の段階における思想を考察する。第一に初期の伊勢神道書の性格が基本的に縁起書であることを指摘している。縁起書という形態をとることは皇祖神としての伊勢神宮の神格の歴史上における優位性の主張のあらわれであり、神国思想・神胤思想といった日本の個別的特殊性を強調する方向性を有していたとする。第二にその教説の基盤となるものは神宮祠官の祭祀体験であり、そこから心身の清浄観が強調され、さらには内在的神観の形成へとつながっていったとする。

次いで度会行忠の思想、とりわけ祠官の奉務心得を記した『古老口実伝』の中に「礼」と「心」の強調が見られることに着目する。「礼」とは神事奉仕のあるべき姿を指し、具体的には穢の排除を意味していたという。さらに穢の排除が内面化されて、雑念なき清らかな心の境地が求められたとする。「礼是心基也」とあるように、普遍的「心」の境地は「礼」という個別具体的な「形」の実践を通じて獲得されるとする。さらにこうした行忠の思想における「礼」と「心」との関係は、特殊性の強調が儒教・仏教の普遍的価値へと連なっていくというその後の伊勢神道の思想構造と共通していると結論付ける。

第三節「伊勢神道の発展と継承」は、初期伊勢神道の思想的特色を整理した上で鎌倉末期の度会家行以後の思想展開を考察する。まず初期伊勢神道の思想的特色として第一に先述の外宮祭神論があり、第二に道徳教的側面として「正直」の強調と「忠」「孝」の強調および徳治主義的政道論の三点があげられ、第三として神道を「心を修める道」として捉える考え方があることを指摘する。

次に度会家行の思想を『神道簡要』によって取り上げている。家行の思想の特色は初期伊勢神道の個別特殊性を脱却し、その教説的部分のみを取り出して神道の教説として一般化したことにあるという。この段階において、神道から峻別されていた仏教や儒教は、神道の教説の普遍化のために積極的に援用されることとなったとする。次いで慈遍と北畠親房の思想に説き及ぶ。ほぼ同時代に活躍した両者の相違点を、慈遍は神道を愚民を導くための君道として捉え、

一方親房は万民神胤観に基づき君臣ともに則るべき道と見たことに認める。伊勢神道の説く「心を修める道」は中世後期に至り吉田神道に受け継がれたとし、「中世神道は伊勢神道思想の自己展開」（186頁）であると結論する。

最後に補論が二篇ある。いずれも著者の伊勢神道論を側面から支えるものであり、本論中にしばしば言及されるテーマである。補論一「中世神国思想の一側面」は中世の神国思想が一向専修に対する反動イデオロギーとして機能したとする黒田俊雄氏の学説への批判を含む。著者は神国思想を貞観年間の第一期、院政期の第二期、元寇のあった第三期に分ける説を踏まえて、各々について考察する。第一期と第三期はいずれも対外的危機を契機としたもので、「神国」とは伊勢と八幡に統轄された「共同体の守護神たる神々の加算的集積体としての国家」（194頁）を意味し、他国を「異類」と見る対外的自国優越意識に支えられていたとする。ただし第三期においては仏教的汎神論・本地垂迹説に基づく中世的神観念に立脚していることが相違点であるとする。これに対し第二期の神国思想は対外的契機によるものではなく、伝統的宗教意識の変動、さらにその基底にある古代末期の政治的社会的変動を背景としたものであるとする。さらに黒田説への批判として、神国思想が一向専修への反動のみならず末法思想超克のための時処機相応の論理として機能したことを中世神祇説話によって論証している。

補論二「中世における神宮宗廟観の成立と展開」は伊勢神宮を宗廟と称すること、および伊勢・八幡を二所宗廟と呼ぶことの思想的意義を考察する。古代において神を祀る神社と祖先を祀る廟とが厳密に区別されていたことを明かしたのち、神社を宗廟と称することは応神天皇を祭神として人間神的性格を有する八幡宮より起こり、十一世紀はじめには形成されていたとする。これに対し神宮宗廟観は宮地直一氏の説のごとく八幡宮に先行して称されたという歴史事実は確認できず、十二世紀中頃から認められ一般化するのは十三世紀に入ってからであるとする。

また伊勢神道において神宮を「宗廟」「宗廟社稷」と称するのは、一つには外宮が内宮と並ぶ皇祖神であることを強調するためであるが、もう一つには神宮が上下万民の祖神（おやがみ）であることを主張するためであり、それははやく『宝基本記』の中に認められ北畠親房の思想に結実する「万民神胤観」の現われの一つであるとする。さらに吉田神道においては神宮のみならず神社一般が廟であるとする主張が見えていることを指摘し、これは神と人との霊的一体性を認める思想に基づくものであり伊勢神道において発生し吉田神道によって継承・強化されたとみる。吉田神道における神葬祭の形成とも関連する重要な問題提示であろう。

四

以上まことに拙いながら内容を一通り紹介してみた。次に若干の論評を加えてみたい。

伊勢神道の形成年代、五部書の成立年代は困難な問題であり先学の説もかなり分かれている。本書においては『宝基本記』『倭姫命世記』の成立が先行し神宮三部書がそれに続くという大まかな前提のもとで立論がなされており、評者もその立場に賛意を評したい。

しかしながら近年五部書の成立を平安末期に遡らせ両部神道にも先行していたとする新たな学説が提示されており（『神道大系・伊勢神道（上）』解題）、定説の確立は一層困難な状況となっている。著者には「神道五部書成立私考」（『東北福祉大学紀要』第四巻第二号）という論文もあるが、今回の著書において収録が見送られているのはこうした事情があるのだろうか。場合によっては立論の根拠が崩れかねない状況でもあり、近い将来著者なりの学説を提示して頂ければと思う。

また『神皇実録』『神皇系図』『天口事書』など著者・成立年代の不確定な伊勢神道書への論及があまりなされていない。伊勢神道との比較で取り上げられた両部神道の思想も大部分『中臣祓訓解』に依拠しているが、『宝志和尚伝』『天地霊覚秘書』などの初期両部神道書の思想との比較検討の手続きも必要ではなかったろうか。さらに言えば本書は五部書および度会行忠の思想に重点が置かれたため、鎌倉末期の度会家行・度会常昌をはじめ、伊勢神道を発展継承せしめた慈遍・北畠親房の思想の考察は比較的手薄となっている。五部書段階においてもかなりの分量を占め、慈遍や親房に至ってさらに深化する神鏡論・神器論などの問題も含め、今後のご研究にまちたい。

「五部書」を中心とする伊勢神道書のテキストから抽出される思想を分析する限りでは、氏の解明したように伊勢神道が神仏の峻別の思想であるという位置付けにはそれなりに整合性が認められる。しかしながら『古老口実伝』の中に「神宮秘記数百巻内最極秘書二世利益要」として伊勢神道書の『飛鳥記』（『御鎮座本紀』）『心御柱秘記』『神皇実録』と共に両部神道書である『大宗秘府』『大和葛（城）宝山記』の名が列挙されている事実がある。あるいは『類聚神祇本源』において『天地麗気府録』『麗気記』が仮託された作者を基準として「釈家」ではなく「官家」あるいは「官書」に分類され、一方で伊勢神道書とされるものが「官家」と「社家」の部にふり分けられているなど、神宮祠官にとって「伊勢神道」と「両部神道」とが明確な対立項として自覚されていなかったことを意味しており、その中で「伊勢神道」が「両部神道」と対置されるような自立した思想体系として存立し得ていたのか否かという点も問われなければならないだろう。「伊勢神道」という概念自体も後世の所産であり、中世においてはどれほど自覚化されていたのだろうか。また両者を対比させて扱うことがいかほど有効であるのかが問われなければならない。「五部書」という概念が近世排仏思想の幻想であるのと同様に、「伊勢神道」という概念も根本的に再検討してみる必要があるのではなかろうか。そのためには神宮祠官の信仰心意のレベルにまで踏み込んで「伊勢神道」の思想構造や成立基盤を解き明かす必要があるのではなかろうか。

しっかりした批評にならないが最後に付け加えれば、第三章第二節および第三節の前半は、伊勢神道の観念的な教説を扱っているためか、あるいは発表された雑誌の性格の違いからか、本書全体から見ると論の運びが若干主観的で捉え所のなさを感じた。

以上瑣末な批評を試みたが、もとより氏の学説への反論というべきものではなく、伊勢神道が担う課題の大きさを二、三提示してみたに過ぎない。本書は従来漠然と指摘されつつも、充分に踏み込ん

で説明されてこなかった本地垂迹説や末法思想・神国思想等の時代思潮と、中世神道思想とりわけ伊勢神道との間の論理的な関連性をあざやかに解きほぐしている。伊勢神道の思想形成の主たる契機を蒙古襲来による神国思想の高揚に求める岡田米夫・久保田収氏以来の通説を否定し、むしろ古代から中世への社会変動を基底とした宗教思想の展開の上に位置付けたことは、従来の神道思想研究の枠組みを乗り越える大きな業績である。

中世神道思想研究は久保田収・西田長男両氏の業績以後しばらくの間、岡田荘司氏による中世神道典籍の成立年代の研究を除けば、捨て置かれ足踏みしていた感があったが、本書によって着実な前進を遂げたといえよう。近年増加しつつある若手の中世神道研究者にとっても、本書の成果は大いなる導きとなろう。

（北九州大学助教授）